The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	タイ人日本語学習者の「結果状態」の「テイル」の習得
Author(s)	Duangkaew, Paosathaporn
Citation	大阪大学, 2016, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/55708
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（DUANGKAEW PAOSATHAPORN）	
論文題名	タイ人日本語学習者の「結果状態」の「テイル」の習得

論文内容の要旨

外国人日本語学習者における「結果状態」の「テイル」の習得に関しては、これまで多数の研究がなされてきた。多くの先行研究では、「結果状態」の「テイル」は日本語学習者にとって習得が困難であり、その日本語学習者の「結果状態」の使用状況や習得が困難な原因が報告されている。しかし、多くの研究において得られた結果は、調査対象者の母語の影響を詳細に考慮せず、母語と関係なく学習者に共通する中間言語の現象として捉える立場に立つものが多い。また、多くの研究において得られた「結果状態」の「テイル」の習得状況は、文法テストなどの質問紙による調査の分析であり、フォローアップ・インタビューなどをして直接日本語学習者から聞いたものではないため、日本語学習者の「結果状態」の「テイル」の習得状況を説明するには不十分であると考えられる。

そこで、本研究は、（調査協力者の母語であるタイ語の影響も含め）日本語の「結果状態」の「テイル」を対応するタイ語の文法形式である「動詞＋□」と「動詞（＋□□）」という2つのグループに分けて、各グループの習得状況と習得に影響を与える要因を、中・上級日本語学習者を対象に、主に文法テストとフォローアップ・インタビューを実施し把握しようと試みた。

本稿の意義を2つ挙げる。一つ目は、日本語の「結果状態」の「テイル」をそれに対応するタイ語の文法形式に分けて分析を行うことにより、これまでの先行研究よりタイ人日本語学習者の「結果状態」の「テイル」の習得に影響を与える要因を詳細に把握することができたことである。二つ目は、タイ語を用いてフォローアップ・インタビューを実施することにより、調査協力者が答えを選択する際に考えていることや選択理由を詳細に把握できたことである。調査の結果、以下の1）～4）の結果が得られた。

1）「結果状態」の「テイル」を「動詞＋□」のグループと「動詞（＋□□）」のグループに分類して調査を実施した結果、「動詞＋□」のグループの得点率が13.71％であるのに対し、「動詞（＋□□）」のグループの得点率が75.28％であった。このことから、「動詞＋□」のグループの方が「動詞（＋□□）」のグループより習得が困難であることが分かった。t検定の結果、両グループの正答率の差は有意であることがわかった（$t(99)=-22.87$, $p<.05$）。つまり、「動詞＋□」の方が「動詞（＋□□）」より習得が困難であることが統計的にも指示されたことになる。

2）「動詞＋□」のグループは習得が困難である。その要因として、①「状態」として捉えにくい（「過去」と捉えてしまう）、②「□＝過去」という間違った知識、③「進行」との混同、が見られた。

①「状態」として捉えにくい（「過去」と捉えてしまう）

フォローアップ・インタビューを実施した結果、正答の「テイル」ではなく「タ」を選択している。その理由として、多くの調査協力者が「その出来事が過去に起きたから「タ」が正しい」と回答している。また、「出来事が過去に起き、その結果が現在まで続いている」と日本語の「結果状態」の「テイル」について説明したところ、ほとんどの調査協力者は「なぜ「状態」と捉えられるのかが分からない」と述べている。つまり、日本語においては「状態」として捉えるにもかかわらず、タイ語では本調査の文法テストで扱った場面を「状態」として捉えないため、タイ語を母語とする本調査の調査協力者にとってはこれらの場面を「状態」として捉えるのが非常に難しく、「状態」ではなく「ただの過去」と捉えて「タ」を選択してしまったことが考えられる。

②「□＝過去」という間違った知識

このグループの「結果状態」の「テイル」にタイ語の「□」が対応する。「□」はタイ語教育では「完了」を表すと言われているが、タイ語母語話者の多くが「完了」ではなく「過去」と認識していると考えられる。このように、タイ語母語話者の中に「□」に関して間違った認識をしている人が多いことを実証するために、本調査においては「タイ語母語話者の「□」に対する意識調査」を実施した。その結果、100人中78人のタイ語母語話者が「□」を「過

去」と間違えて捉えており、タイ語の「□`_」に関して間違った知識を持っているタイ語母語話者が少なくないことが分かった。そのため、タイ語では「□`_」が使用される場面に遭遇した際、タイ人日本語学習者が「□`_＝過去」という間違った知識を使用し「タ」を選んでしまうことが考えられる。

③「進行」との混同

「動詞＋□`_」のグループにおいては、調査協力者の選択が正答である「テイル」ではなく圧倒的に誤答の「タ」に偏っている。「タ」を選択した理由を探るため、フォローアップ・インタビューの際に調査協力者に「「テイル」だとどういう意味になるのか」と質問した。その結果、多くの調査協力者がこのグループのすべての動詞において「「テイル」は「その出来事の最中」と答えている。このことから、本調査の調査協力者にとってこのグループの動詞の「テイル形」は「結果状態」より「進行」との結びつきの方が強いことが分かった。

3）「動詞（＋□□_）」のグループの習得は容易である。その要因として、①「状態」として捉えやすい、②「□□_」の「正の転移」、③「タ」に関する間違った知識、が見られた。

①「状態」として捉えやすい

「動詞（＋□□_）」のグループにおいては、「動詞＋□`_」のグループと違い、ほとんどの調査協力者が正答である「テイル」を正しく選択している。フォローアップ・インタビューにおける「なぜ「テイル」を選択したのか」という質問に対する回答として、最も多かったのは「「状態」だから」である。この選択理由は「動詞＋□`_」のグループにおいては見られなかった。このことから、「動詞（＋□□_）」のグループの動詞の「テイル形」は「動詞＋□`_」のグループの動詞に比べて、調査協力者にとっては「状態」として捉えやすいことが考えられる。つまり、タイ語においても日本語においても「状態」として捉えられることが、タイ人日本語学習者が「動詞（＋□□_）」のグループの動詞を学習する際、習得が容易である理由の一つとなっていると考えられる。

②「□□_」の「正の転移」

フォローアップ・インタビューの際、「「状態」であるから」という理由を述べる時に、「存在」を表す時に使うタイ語の「□□_」（日本語の「いる」と同じ意味）を使う調査協力者が多かったことから、調査協力者がタイ語の知識を活かして答えている、「正の転移」が見られた。

③「タ」に関する間違った知識

「テイル」と「タ」を区別できているかどうかを見るために、「「タ」はどういう意味で、どのような時に使うか」と質問したところ、「その出来事が過去に起きて、今はその状態ではなくなったか、今のことは言及していない」という誤答が最も多かった。つまり、この質問に対して正しく答えられた調査協力者がほとんどいなかった。このことから、一部の調査協力者にとっては、現在と切り離して過去のことを述べる時に「タ」を使用すると理解されているため、「今の状態」を表すのに不適切であると考え、「タ」を選択せず、正答である「テイル」を選択していると考えられる。

以上のことから、タイでの日本語教育現場において、学習者のより深い理解を期待するためには、タイ人日本語教師が「結果状態」の「テイル」を導入する際、①「□`_」と「□□_」に触れ、②「結果状態」の場面に対する日本語母語話者とタイ語母語話者の認識の違いを説明することが望ましいと提言したい。

様式7

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名（DUANGKAEW PAOSATHAPORN ドゥアンケーオ・パオサタポーン）		
論文審査担当者	（職）	氏　名
	主 査　教授	真嶋　潤子
	副 査　教授	宮本　マラシー
	副 査　教授	堀川　智也
	副 査　教授	鈴木　睦
	副 査　教授	筒井　佐代

論文審査の結果の要旨

本研究は、日本語学習者が上級レベルになってもなかなか習得しにくい言語項目の一つであるアスペクトの「テイル」について、タイ語母語話者の学習者に「結果状態のテイル」が理解されにくい仕組みを明らかにしようとした実証研究である。「テイル」の複数の用法のうち、「動作の進行」を表す表現であることは習得しやすいのに対し、「結果状態」は理解も習得もしにくく、例えば「（床の虫を見て）虫が死んでいる」と述べる場合に、*「虫が死んだ」と言ってしまう学習者が多いのである。このようなアスペクト研究は、日本語学ではもちろん、その習得については日本語教育学で、異なった母語や学習レベルの学習者について先行研究はあるものの、「テイル」の全般的な習得状況を調査するものが多く、本研究のように「結果状態」に絞って学習者の文法知識とその判断プロセスに迫ろうとしたものは見られず、「母語の影響」と一言で片付けられがちな側面に深く切り込んだ先駆的な研究であると言える。

本研究は修士論文（ドゥアンケーオ 2013）の成果を踏まえ、学習者に習得されにくい「結果状態のテイル」について、その「母語の影響」の仕組みを明らかにすべく研究した論考である。調査は(1)文法性判断テスト、(2)フォローアップインタビュー、(3)教材分析（指導方法の調査）、(4)タイ語母語話者の（完了を表す助動詞）「leew」に対する理解調査から成る。(1)と(4)はそれぞれ別の100名の調査協力者を得て、手堅く行われた。(2)も丁寧に分析され、学習者の理解状況が明らかにされた。

本調査の結果、日本語の「結果状態のテイル」に対応するタイ語の言語形式[V+leew]と[V+yuu]に着目して文法性判断テストの結果を分析すると、[V+leew]の動詞グループの方が、明らかに習得が困難であることがわかった。フォローアップインタビューの結果から、「結果状態のテイル」を選ぶべきところで選ばなかった学習者はもちろん、正答した学習者でも、「結果状態」を理解しないでたまたま正解していたことがわかった。さらにタイ語の助動詞[leew]の理解に関する調査をしたところ、8割近い母語話者が「完了」とは理解しておらず、「過去」だと間違って単純化した認識をしていたことが判明した。[V+yuu]のタイプの動詞は、タイ語の認知の仕方と似ているため「正の転移」と見なせる一方で、[V+leew]の方は、母語の認識の不十分さに加えて「結果状態」が「状態」としてイメージしにくいという点が言語間エラーを引き起こす要因として指摘された。これらはいずれも先行研究を超える新しい指摘である。

動詞によって「結果状態」をイメージしにくいものがある点、タイ語の助動詞[leew]に関するさらなる研究が必要な点、言語知識が運用に反映されるかどうか不明な点など今後の課題はあるものの、本研究の成果を踏まえた日本語教育現場への提言は、タイ語を母語とする日本語学習者に理解を促す上で、貴重な示唆に富んだものとなっており、第二言語／外国語としての日本語の教育現場への少なからぬ貢献が期待できる。

以上のことを踏まえ、審査委員会は、本研究が博士号を授与するに値する好著であることを認め、合格と結論づけた。